

利用者の利便性・快適性を高める施設整備

- ◆ 来館者と博物館、フィールドと展示などを ICT (情報通信技術) を活用して快適で楽しくつなぐ
- ◆ だれもが能力を最大限に生かして楽しめるようユニバーサルデザインに基づく施設づくりを一層推進
- ◆ ストックマネジメントの考え方を導入し、予防的な維持保全により施設・設備を長寿命化

多様な主体との連携

- ◆ 地域との連携
 - ・ さまざまな地域において体験の機会を提供
 - ・ 主体間の交流や連携の仕組みづくりを推進
 - ・ 体験・学習プログラムを地域の人びととともに開発し実施
- ◆ 学校との連携
 - ・ 県が実施する学習プログラムとの連携を強化
 - ・ サテライト博物館や出展施設など学校や地域での博物館活動を推進
 - ・ 博物館利用に関心がある教員のネットワークを構築
 - ・ 学校で活用できるプログラムを開発し、教員の博物館利用を促進
 - ・ 県外小中学校の教育委員会や校長会等との連携を強化
- ◆ 関係団体との連携
 - ・ 他の試験研究機関や行政機関との連携を強化し、共同して研究・調査
 - ・ 共同事業、セット回遊、相互訪問ツアーなど博物館間士の連携活動を強化
 - ・ 地元草津市や鳥丸半島にある近所施設、近所森農園等との連携を強化
- ◆ 企業・大学との連携
 - ・ 企業とともに「湖と人間」の共存関係を築く新たな活動を展開
 - ・ 新しい連携のあり方を提示して協力関係を強化
 - ・ 資金協力と企業の環境保全活動・CSR (企業の社会的責任) 活動の発信
 - ・ 企業、大学とのパートナーシップ協定

効果的な広報・営業活動の展開

- ◆ 広報・営業活動の強化
 - ・ ターゲットを明確にし、総的な形でアピールできる魅力を持った情報の発信
 - ・ マスメディア共催やホームページ刷新による国内での認知度の向上
 - ・ 観光客や研究者に向けて海外での認知度の向上
 - ・ 広報・営業スタッフの配置
- ◆ アクセスの向上
 - ・ びわこビクターズビューロー・旅行業者等との連携
 - ・ 料金体系の検討
 - ・ 路線バスや湖上交通など琵琶湖博物館へのアクセス (経路) の向上

事業規模およびスケジュール、期待される効果

事業規模およびスケジュール

・ 新たな知見や技術などを盛り込んで博物館としての魅力を一層向上させ、県民の誇りとなる博物館の実現を目指して展示室をほぼ全面的にリニューアルすることから、他館のリニューアルにかかった平均単価等を参考に総額を概算すると、20億円～30億円程度が必要。

・ 3期に分けてリニューアルを実施するとして、他館の実績を参考にリニューアル後の増加率を算出すると、25億円とした場合、次のおり来館者数の増加が見込まれる。

◆リニューアルスケジュール

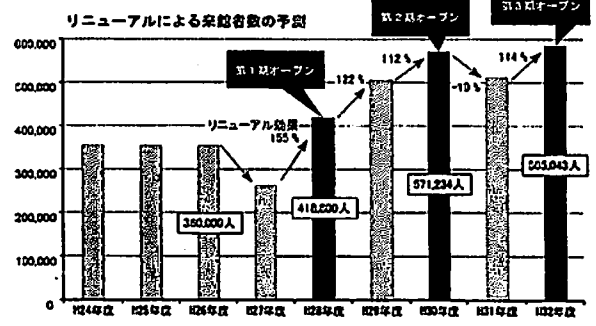
平成 28 年度 (開館 20 周年)	第 1 期リニューアル
平成 30 年度	第 2 期リニューアル
平成 32 年度	第 3 期リニューアル

◆事業規模

20～30億円

◆経済波及効果

整備費を 25 億円とした場合
総合効果：56.99 億円
(波及効果倍率 2.28 倍)
就業誘発効果：508 人



博物館の「木」から地域の「森」へ

リニューアルを通して、琵琶湖博物館の発信力・活動機能が強化されることにより、次のような効果が期待され、「湖と人間」の新しい共存関係が築かれた社会を実現

心に「種」を
一気づきを促し、地域の未来を地域の人びとと考えるー

「苗」を育てる
一自らの力で活動する人びとを育み、ともに歩むー

◆ 過去から学び、現在を見直し、未来を新たな視点で考える
深みのある理解が促進する

◆ 博物館利用が促進されることで、次代を担う人が育つ

◆ 地域の問題を自分のこととして理解し、琵琶湖の大切さに気づき、誇りに思う人びとが増加する

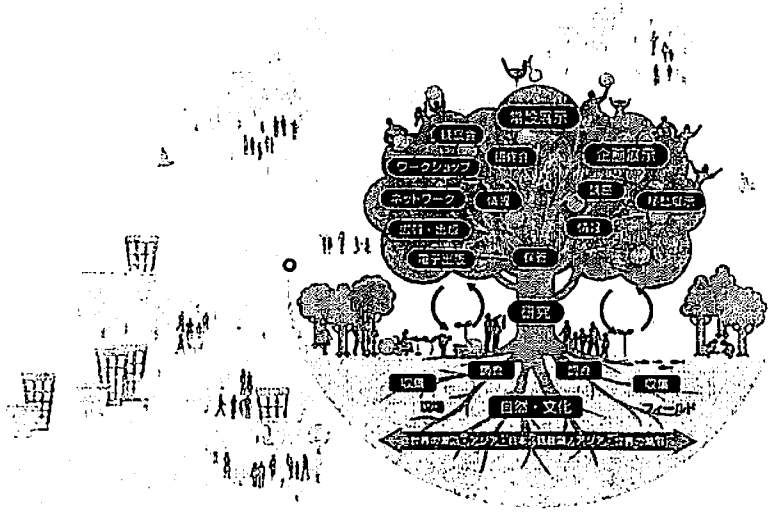
◆ 暮らしの中に博物館が定着し、地域で新たな活動が生まれ、広がる

地域に根ざした木々をつなぎ、発展し続ける「森」へ

◆ 琵琶湖博物館を拠点とした新しい社会的なネットワークが形成され、「湖と人間」の新しい共存関係が築かれた社会が実現する

新琵琶湖博物館創造基本計画案 (概要版)

**湖をめぐる博物館の「森」構想
～博物館の「木」から地域の「森」へ～**



平成 26 年 (2014 年) 3 月

新琵琶湖博物館基本計画案の概要

琵琶湖博物館 17年の実績と課題

これまでの実績

- ◆博物館の基礎的機能
 - ・研究・調査により「湖と人間」への理解の進展とともに、琵琶湖のプランクトンや昆虫など新種 53 種、新記録種 152 種を発見
 - ・県政課題や県民ニーズの高い課題について研究を行い、成果を環境保全型農産物や希少種保護などに活用
 - ・企画展示を 21 回、ギャラリー展示を 40 回開催するなど、地域の人びとの協力関係が構築され、博物館活動の基盤が形成
 - ・「湖と人間」のより良い共存関係を目指した意欲的な展示が好評を博し、800 万人以上が来館
 - ・「はしかげ」、「フィールドレポーター」など市民参加型博物館として先駆的な活動を行い、船舶のモデルとなり、国内で高く評価
 - ・日本屈指を誇る民具コレクションをはじめ、累計 85 万点の図本・資料を収集し、データベース 17 分野、電子図鑑 8 分野を公開
- ◆博物館の多面的機能
 - ・環境学習・生涯学習の拠点として県内小学校の 7 割超が利用し、学習効果において高い評価を受けてきた
 - ・文化・観光施設として県内観光入込客数が 20 位であり、文化施設としてはトップ
 - ・国際学芸員を擁し、国際研究・交流の拠点として海外博物館との共同研究、海外学芸員の受入れ等国際的な研究活動を展開

課題

- ◆来館者減少への対応
 - ・平成 12 年頃に 50 万人だった年間来館者数が平成 24 年頃には 36 万人に減少
 - ・来館者数の減少は「一般」(大人)の減少分とほぼ一致
 - マーケット調査から見えてきた課題とターゲット層
 - ・近隣府県では「知らない人」が 7 割
 - ・「わかりばいしない」「情報最新でない」との意見が増加
 - ・大人が満足できる展示・イベントへの要望
 - ① 大人の潜在利用者層：大人が楽しめる展示・レファレンス機能の強化
 - ② 親子利用者層：親子で楽しめる展示・体験空間の提供
 - ③ 観光客：観光客が興味を極く展示や季節ごとに楽しめる屋外体験
- ◆常設展示の情報発信力の低下
 - ・研究・調査成果や実物資料の常設展示への活用への必要性
 - ・参加型・体験型展示により、フィールドの魅力やおもしろさを伝える発信力の高い新たな展示へのニーズの高まり
 - ・外来生物の移入、鳥獣害の深刻化などの新たな環境課題に対応する学びや情報発信の場の充実
- ◆人が育つ環境学習の拠点機能への必要性
 - ・だれもが気軽に参加でき、実践できる新たな利用者制度
 - ・「交流の場」としての博物館から地域での実践を担う「人が育つ」博物館へ
- ◆少子高齢化・成熟社会への対応
 - ・民俗資料等を活用した高齢者の憩いの場・元気を取り戻す場、高齢者と子どもたちの交流の場など、博物館の新しい活用のあり方の提示
- ◆琵琶湖・淀川流域から広く世界を視野に入れ「湖と人間」を考える場
 - ・琵琶湖の象徴施設として存在感を県内外で高める必要性
 - ・「飲水思源」の想いを下流府県の人びとと共有し、琵琶湖・淀川流域における拠点として、環境学習への取り組みや情報発信力の強化
 - ・ILEC(国際湖沼環境委員会)や海外博物館等との連携を強化し、アジアをはじめ世界の湖沼研究の窓口へ
- ◆施設整備にかかる必要性
 - ・多様な人びとに対する安全・安心の確保、基本的サービスの向上、施設充実のための施設整備の整備

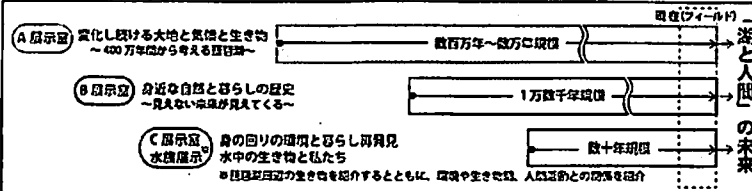
リニューアルでこんな博物館をめざします！

1. 「湖と人間」のあり方を県民とともに考え、ともに行動する博物館
マザーレイク 21 計画第 2 期の二つの柱である「琵琶湖流域生態系の保全・再生」、「暮らしと湖の間わりの再生」の実現に向けて、琵琶湖の大切さに気づき、主体的な行動を起こす人びとを応援する。
2. 次代を担う人が育つ拠点となる博物館
県民ニーズに応え、県政の課題や高度化・複雑化した情報をわかりやすく伝え、体験・交流の機会を数多く提供することで、湖と人間が共存する持続可能な社会の実現に向けた次代を担う人が育つ場となる。
3. 地域活性化の核となる博物館
琵琶湖博物館は博物館であると同時に研究施設、文化施設、環境学習施設、観光施設という多面性を生かし、琵琶湖・滋賀を県内外に発信し、県のアイデンティティを高め、地域活性化の核となる施設をめざす。

展示空間の再構築

琵琶湖の魅力発信し、現在とつながる展示空間

- ◆「湖と人間」の未来を考えることができる展示
琵琶湖の「現在」をとらえなおす 3 つの時間スケールで、自然や人びとの暮らしの変化、そのつながりを伝え、琵琶湖の過去からいま、そして未来を考える多様な視点を提供する



- 【特徴】
- ◆「つながり」を紹介することで自分とのかかわりに気づく
 - ◆「いま」の展示でフィールドへ誘い、「湖と人間」の未来を考える
 - ◆交流や対話がうまれるにぎわいのある展示室

A 展示室：かわりつづける自然と琵琶湖のおいたち

生き物の進化や地殻、大地と気候の変化など、長い時間スケールにわたって見ていく世界を紹介し、現在の暮らしとの間わりや未来を考える展示となる

変化し続ける大地と気候と生き物 ～400 万年間から考える琵琶湖～

- ・数百年～数万年という長い時間スケールでの自然環境の変化を現在の環境問題とのかかわりとともに紹介する。
- ・長期的な自然の営みという視点からみた、生き物としてのヒトを考えることで、B 展示室や C 展示室へのつながりをよりわかりやすくする。
- ・地域の博物館や人びとと連携した化石・岩石などの展示コーナーおよび交流を行う空間を設け、琵琶湖フィールドの魅力を伝える。

水期の鳥 体験

B 展示室：身近な自然と暮らしの歴史

歴史展示の中に環境を取り入れ、自然認識の変化に軸足を置くことにより、自然の変化と人びとの暮らしがどう結びついていたのかを示す展示となる

身近な自然と暮らしの歴史 ～見えぬ未来が見えてくる～

- ・1 万年～数百年の時間スケールでの身近な自然の変化や人びとのかかわりの歴史を紹介する。
- ・気候、地殻の変動などと関係しあいつながら変化し続ける自然のなかで、人間の自然認識と自然と暮らしのかかわり、水田稲作や仏教など主に大地から導入された新しい文化・技術の受容と独自の文化のみまぐみ
- 二つの柱として、「いま」とは全く異なる自然と暮らし方があったことを紹介する。

交流スポット(六道めぐり、ムラの信仰)

C 展示室：琵琶湖周辺の環境と人びとの暮らし

身近な景観をとりあげ、新たな発見や課題、季節のフィールド情報などを随時更新して紹介することで、最新課題に対応し、いつ来ても琵琶湖地域のいまを感じられる展示となる

琵琶湖地域のいま ～身の回りの環境と暮らし再発見～

- ・沿岸部から山地までの身近な景観を入口に、関連するトピックと環境・人間・生き物の関係性をわかりやすく示す。
- ・高度経済成長期以降に起こったさまざまな変化を紹介することで、現在をとらえなおし、未来を考える展示となる。
- ・身の回りの世界の中にもおもしろさを知ってもらい、博物館の屋外展示や交流事業とつなぎ、魅力あるフィールドへ誘う。

ヨシ原をあるいてみると

水族展示：淡水の生き物と人びとの暮らし

琵琶湖の注目すべき魚の生態や行動を紹介、琵琶湖の生き物と、漁業、食文化など人とのかかわりを一緒にわかりやすく示す展示となる

琵琶湖地域のいま ～水中の生き物と私たち～

- ・魚類、甲殻類や水草などをはじめとした琵琶湖に生息する様々な生き物を展示し、それぞれの生態環境を通じて、琵琶湖のもつ生物多様性や食文化などの「生き物と人とのかかわり」を伝える。
- ・季節によって違う生き生きとした生き物の姿を展示することで、富せや発見を促し、暮らしとのかかわりを紹介する。

マイクロアクアリウム

交流空間・交流機能の再構築

交流空間

【大人のディスカバリー】～大人も遊べるリアルな知的空間～

- ・大人の興味や探究心に応え、新たな利用層を呼び込む
- ・感覚で理解するハンズ・オン展示、自ら調べさらに知りたくなるきっかけをふんだんに創り出す
- ・博物館スタッフが、来館者と対話しながら交流



【ワクワク体験スペース】～だれでも楽しく体験～

- ・いつ来ても、折々に楽しめる多様な体験プログラムを提供
- ・はしかげ、フィールドレポーターなど地域で活動している人たちが自らの体験・成果を伝え、来館者と直接触れ合う交流

【レストラン・ショップのエンターテインメント機能強化】

- ～地域のオリジナルな魅力を発信～
- ・地元産食材や特産品を味わえる特色あるレストラン
- ・オリジナルグッズや書籍等、琵琶湖博物館ならではの品ぞろえのショップ

【樹屋トレイル】～自然に近づき、琵琶湖を感じる～

- ・琵琶湖を渡る鳥を感じながら、琵琶湖が一望でき、森を上から観察できる空中散歩道

【環境学習センター】～多様な主体とのネットワークを生かす～

- ・主体的に実践・行動できる「子育て・子育て」において中核的な役割を担うため、環境学習の拠点機能を強化し、多様な主体間の協働・連携を推進

【地域環境活動交流室】～活動の輪を地域から広げる～

- ・はしかげ、フィールドレポーター、地域で活動している人たちの活動場所

交流機能

【見える、伝わる、広がる参加と交流】

- ・博物館で活動している人たちの顔が見え、興味を持つ人だれもが参加できる交流を展開
- ・レポートしたくなるプログラムの企画・開発



【地域をつなぐ交流】

- ・地域の人びとによる活動を伝え、広める場づくり
- ・ILEC(国際湖沼環境委員会)などと連携し、資料・情報収集、研究、交流、展示の国際化、地域と海外の人的交流の促進